

研修報告書No. 3 1

所 属：東京大学病院医学部附属病院
氏 名：二宮 英樹研修医
研修先：梶原町立国民健康保険梶原病院
津野町立国民健康保険杉ノ川診療所

私は研修医としての1年目を茨城県の県立中央病院で過ごし、2年目を東京大学医学部付属病院で過ごしました。研修終了まで残すところ2ヶ月というタイミングで、この高知県の梶原病院で地域研修を行うことができ、実に多くのことを学び、貴重な体験が出来ました。それはこの病院の医療が素晴らしかったからでもあり、梶原町という地域の底力によるものでもあり、内田院長を始めとした病院のスタッフの器の大きさのおかげでもあります。おかげさまで、高知県梶原町に来るにあたって経験したいと思っていたことは全て出来た上に、想像を遥かに超えて充実した日々を過ごせました。実に様々なものを得たのですが、この報告書では4つにまとめてみました。

一つ目。医療、介護、福祉の連携です。この梶原病院は同じ建物内に病院と、福祉等の町役場の一部が存在しています。全国でも非常に珍しい事例だと思います。そしてハード面だけでなく、ソフト面でも様々な連携があります。医師、看護師、リハビリスタッフ、役場の職員、ケアマネ、介護事業所のスタッフ、薬局薬剤師など様々な面々が集まる会議が多数存在しています。それらを通じて、「顔の見える関係」が構築されています。今まで参加した勉強会や多くの出会いを通じて、現場の人々がしきりに「顔の見える関係」の重要性を説いていました。私はまだ実感としてその大切さをわかっていなかったのですが、今回痛感することが出来ました。病院の二階で、たまたますれちがった院長と町役場職員が患者さん（町民）のことを話し合い始める。それがいかに珍しくて、大切なことか。医療が生活に密着すればするほど、全人的な視点を持つべきほど、患者さん（町民）にまつわる様々な問題が見えてきます。梶原の場合は、誰が必要な情報を持っていて、誰が患者さん（町民）の役に立つことができるか、非常にわかりやすいです。こういった形で、医療、介護、福祉の連携がシームレスになされています。

二つ目。在宅医療について。特に在宅死。学生時代に在宅医療を見学したことがありました。あるいは勉強会や本を通じて、「在宅医療」の大切さについて聞くことが度々ありました。あるドクターは熱を持って語ります。「自分の家で死ぬるのは素晴らしい」と。しかし研修医2年目であり、大きな病院での臨床しか経験していない私は、その言葉の本当の意味がわかっていませんでした。

私が梶原病院に来て間もなく入院してきた患者さんがいました。やがて軽快して退院したのですが、外来でがんの末期であるということが分かり、在宅で看取る方針となりました。私は一回だけ、その患者さんの自宅に往診に行くことができました。その家で、彼がいかにいい笑顔をしていたか。病院ではあり得ない笑顔。そして何よりも、そのお父さん

の顔が別人でした。「病院」という場所が、患者さんやその家族にとって、いかにアウェイであるか。「在宅死」が万人にとって素晴らしい逝き方であるかは分かりません。でも、家で看取られることにより、最高の最期を迎えることのできる人たちもいる。その事実を知れたことは自分にとって貴重な体験でした。

そして在宅死を可能にする上で、医師の存在はかかせません。その医師が往診で何をしているか。患者さんを触って、聴診器を当てて、話を伺う。それだけです。大学病院で行われているような医療とは全く別物です。高度な医療技術は全く要しません。でも、それだけで救われる人たちがいる。それを切に必要としている人たちがいる。「いったい医療とは何だろう」、そう考えざるを得ませんでした。

三つ目。「死」を経験しました。その患者さんはわずか数ヶ月まえにがんが発覚して、大病院で大変な手術をして、でも結局体のいろんなところに転移していることが分かり、お看取りの方針となりました。最後に、自分が生まれ育ち、ずっと暮らしてきた梶原町に帰りたい、と。その患者さんは大病院から梶原病院に転院してきました。転院初日、痛みや苦しさにぐっところえる患者さん。そしてその姿を見守る家族の覚悟をひしひしと感じ、その愛の深さを目の当たりにしました。最期には麻薬等を使った緩和医療を行い、わずか一週間でお亡くなりになりました。非常に美しかったです。医師として病院で働いていると、人間の汚い部分や、社会の闇に触れることが多いです。家族と親族に見捨てられ病院にたどり着いたおじいちゃん。虐待を受け精神疾患を患ってしまった人たち。生活保護を受けることで甘い汁を吸って生きている人。自分自身が歪んでしまいそうな瞬間もあります。でも一方で、人間の素敵な部分、美しい部分を見ることがあります。それは生き様でもあり、死への向き合い方でもあり、家族への愛であったりもします。ごくたまに、そういった瞬間に立ち会えることが出来て、医者冥利に尽きるといったところでしょうか。

四つ目。最期。これは内田院長の言葉。「梶原で長く暮らせてよかった。梶原で死ねて良かった。町民がそう思ってくれるような病院にしていきた。」この言葉は私が梶原に来た時のオリエンテーションや院長の講演を通じて度々耳にしました。梶原で過ごしていくうちにその意味がだんだんと分かってきました。在宅の話然り、「死」の話然り。梶原病院は、あるいは梶原町は、真摯に死や生と向き合っていて素敵だな、という感想を抱きました。

さて、私自身はこの4月から脳外科医としての道を歩み始め、梶原病院のような世界とはまた違ったところで臨床に携わっています。一言で医療といっても様々な形があり、医師としての働き方も様々なんですね。間違いなく日本の地域医療のモデルケース、と胸を張れる地域で研修できて、良かったです。